

2012年1月11日(火)

第一生命経済研究所 経済調査部

副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

### フランス国債格下げ懸念が和らぎ、銀行株主導で欧米株は軒並み高

欧州株式市場は金融株主導で大幅反発し、仏、独、スペイン等の主要株価指数は5日ぶりの上昇となりました。好材料視されたのは、格付け機関フィッチが「今年中にフランス国債を格下げする見通しはない」との考えを示したことでした。フィッチは昨年末にフランスやイタリア、スペイン等ユーロ圏15カ国の国債を一斉に「ネガティブ・ウォッチ」に指定し、市場では格下げ懸念が広がっていました。現在、ネガティブウォッチに指定されているフランス以外の国債については1～2段階格下げの可能性を改めて示唆しましたが、市場が最も警戒していたフランス国債の格下げ懸念が和らいだことで、ひとまず安心感につながりました。また、中国の12月の貿易統計で輸入の伸びが鈍化したことを受けて金融緩和観測が広がったことも株式市場の追い風となりました。さらに、フランスの11月の鉱工業生産が前月比+1.1%増と予想に反して上昇したことも好材料でした。

米国株式市場も欧州株高の流れを受けて堅調に寄り付きました。前日引け後に発表された米アルミ大手の10-12月決算は最終利益が10年1-3月期以来の赤字転落も事前予想どおりでサプライズはなく、むしろ売上高が予想を上回り、同社CEOが先行き見通しについて楽観的な見方を示したことが好感されました。今後本格化する企業決算への期待感も追い風にNYダウの上げ幅は一時+120ドルを超えました。しかし、後半以降は伸び悩み、結局NYダウは+69ドル高の12,462ドルで引けました。

欧州債券市場では株高を背景に独国債利回りは上昇し、周辺国債の対独スプレッドも縮小しました。ただし、イタリア10年国債利回りは依然7%台で高止まりしているほか、12日木曜日にはECB理事会やイタリア、スペインの国債入札等も控えており、様子見ムードの強い展開でした。

### 株式市場は小幅続伸も、逃避的な需要等から国債利回りは低下

日本株は小幅高で寄り付きました。金融や素材関連株中心に半数以上の銘柄が値上がりし、株価指数を支えました。しかし前日同様、終始動意に乏しく、8,400円台前半での小動きの展開でした。特に後場からは値動きがほとんど見られず、日経平均株価の値幅はわずか20円程度でした。結局、日経平均株価は前日比+25円高の8,447円と小幅続伸で引けました。日経平均株価にもっともプラス寄与したのは衣料専門店大手株でした。インド政府が専門店への外資規制撤廃を発表したことなどから「インドへ出店検討」と一部メディアで報じられたことなどが好感されました。ただし、東証一部売買代金は8,691億円と引き続き低水準でした。一方、国内債券市場では10年国債利回りが一時0.96%と約1ヶ月半ぶりの水準まで低下しました。欧州問題を筆頭に先行き不透明感が強い中、投資家のリスク回避志向の強さが窺われる相場展開でした。

海外市場ではフィッチが今年中のフランス格下げの可能性はないとの見方を示したことが市場センチメントの改善につながりましたが、フィッチ以外の格付け機関においてはフランスも含めたユーロ圏諸国の格付けを引き下げる方向で現在見直し中で、フランス国債の格下げリスクが払拭されたわけではないことに注意が必要です。